

播磨の古代寺院と造寺・知識集団 34

播磨の新羅系及び傍流の軒丸瓦

寺 岡 洋

主流（メジャー）と傍流（マイナー）の瓦

寺院の軒丸瓦瓦当（がとう）には主として蓮華文がデザインされる。寺院により特徴的な文様が施文されており、この文様を比較することで寺院を建立した集団・氏族、さらに集団・氏族間のネットワークが推測されている。

日本最初の本格的な寺院である飛鳥寺（法興寺）は、蘇我馬子が発願し、百濟聖明王が派遣した技術者集団の指導により崇峻元年（558）に着工され、610年前後にはほぼ完成したようだ。

創建飛鳥寺の主要な軒丸瓦は2種類あり、宝塚歌劇に由来する「花組（上図）」「星組（下図）」と略称されるが、これらは百濟直系の瓦であり主流（メジャー）の瓦である（ヤマト王権の中枢にいた蘇我本宗家でも築造に50年も要している！）。

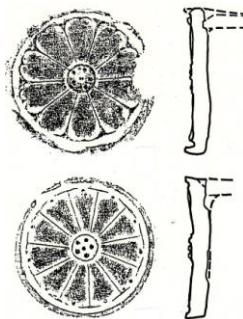
飛鳥時代に建立された初期寺院は大和・河内が中心で、それぞれの寺院名をとって軒丸瓦の系統の名称にしている。山田寺式、川原寺式、法隆寺式等々で、これらは全国区の瓦である。

しかし、飛鳥寺でも法隆寺でも、さらに日本全土で主流ではなく、文様の系譜が明らかになっていない非主流・傍流・少数派（マイナー）の瓦が使われている。瓦は日本列島に存在しなかったものであり、日本で新しいデザインが生み出された契機には、渡来系集団・氏族の存在や朝鮮三国との直接な交流が考えられるであろう。

古新羅系軒丸瓦^①

百濟のみではなく、古新羅（統一新羅以前、三国時代の新羅をいう）の影響を受けた瓦も見られる。話が込み入るのは、新羅の瓦が高句麗・百濟・中国南北朝の影響を受けていることで、玉葱の皮を剥ぐように他地域の影響を除くと古新羅の影が薄くなる。この小文では「古新羅系瓦」については、以下のような上原氏〔1996〕の定義に倣い、引用する場合は各著者の用例によります。

古新羅系軒丸瓦とは、「高句麗・百濟に類似例があつても、新羅の古都慶州付近で主体的に出土する瓦が最も似ている場合」を指す。

古新羅系軒丸瓦について^②

どのような特徴をもつデザインを古新羅系軒丸瓦というのか？古新羅の瓦についての研究は古く戦前からあるが、森郁夫氏により提唱された「古新羅系軒丸瓦」では、瓦当紋様における古新羅の要素として10項目提示されており〔森2003〕、以下に挙げる。

- 1) 蓮弁は無子葉（単弁）で、幅広のものと蓄状に先端を尖らせるものがある。
- 2) 蓮弁には凹弁に作られるものがある。
- 3) 蓮弁は八弁が主流であるが、六弁がめだつ。
- 4) 蓮弁に鎬（しのぎ）というよりも、縦に一本の凸線を入れるものがある。
- 5) 蓮弁内にパルメットを入れるものがある。
- 6) 中房が大きく作られるものがある。
- 7) 中房内を放射状にいくつに分割するもの。
- 8) 中房の周囲に溝をめぐらすものがある。
- 9) 弁区と外縁との間隔が広く離れている。
- 10) 外縁が幅広く作られる。

森郁夫氏以外にも、多くの研究者が古新羅系軒丸瓦について触れられており、順次紹介します。

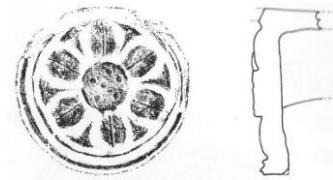
播磨の新羅系軒丸瓦リスト

森郁夫氏〔森1990〕と金誠龜氏〔金誠龜1995〕が取上げられた播磨の古新羅系軒丸瓦とあわせて、播磨で見られる「六弁」の資料から紹介します



■ 単弁六弁蓮華文

森郁夫氏と金誠龜氏が広渡（こうど）廃寺（賀毛郡・小野市）の六弁（六葉）の軒丸瓦を取上げられている。



広渡廃寺は双塔をそなえ、伽藍配置は薬師寺式に類する。発掘調査され、史跡公園として整備されている。

■ 広渡廃寺^③・重圓文縁単弁六葉花文

「蓮弁中央には明瞭な鎬をもち、中房を大きく作っている」（森）。報告書〔小野市2005〕の軒丸瓦I（上図2枚）で、92点と出土量が多く、創建瓦と考えられている。

類例として、南滋賀廃寺（近江・滋賀郡）が挙げられている。南滋賀廃寺は錦織村主（にしこりの

すぐり)が建立を主導した「錦部寺」ではないかと推定されている。

金堂・小講堂・塔が瓦積基壇で、輻線文縁(ふくせんもんえん)軒丸瓦も出土しており、渡来系寺院であることに異論はないようである。輻線文縁軒丸瓦は八弁であるが、「蓮弁中央に明瞭な鎧」が見られ、古新羅系軒丸瓦の特徴を示す。(『むくげ通信』265で紹介)。

■ 広渡廃寺 (右図2枚)

・鋸歯文縁単弁六葉花文

小野市報告書の軒丸瓦IIに該当し、「六葉の蓮弁は間弁をはさんで二葉ごとに輪郭線で囲む。蓮弁は肉厚で、横から見ると弧を描き中央には縦線を入れる」。

東塔周辺で多く出土することから、主として東塔で使用されたのではないかと考えられている。

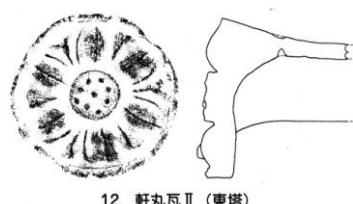
金誠龜氏は、単弁

様式の「稜線円形型式」について、「肉厚な蓮弁内に太・細の稜線が刻まれて、弁端が半円形状に曲面をなしている瓦当型で……古新羅を最も代表する古式瓦当型」であり、「6世紀後半から7世紀後半まで主力をなした」と記される。

「六葉型・八葉型・九葉型」などがあり、六葉型例で広渡廃寺例を取上げられている。



軒丸瓦II (東塔)



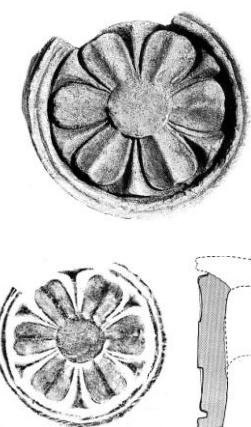
12. 軒丸瓦II (東塔)

■ 河合廃寺⁴⁾ (右図2枚)

・重圓文縁単弁六葉花文

河合廃寺は広渡廃寺と加古川を挟んだ西岸に位置する(賀毛郡・小野市)。

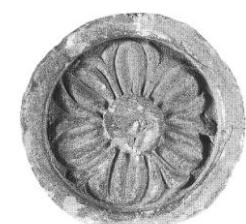
賀毛郡で最初に建立された寺院とされ、創建瓦は北野廃寺(山背)などで使用された「山田寺亞式」軒丸瓦と考えられている。



■ 西条廃寺⁵⁾

・素縁単弁六葉蓮華文

加古川下流東岸の印南野台地上に立地する(賀古郡・加古川市)。発掘調査により7種類の軒丸瓦が出土しているが、すべて特色ある。

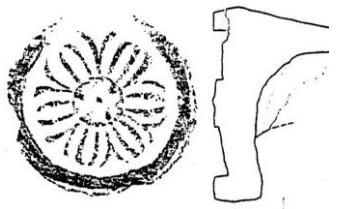


報告書 [加古川市1984] 軒丸瓦IVに該当する(右図、左欄下図)。

「花弁は弁中央が凹む(凹弁)ため、あた

かも2葉のごとくに見える。間弁はY字状で高く盛り上がり、花弁より高い。外縁は広く、前方に突き出した直立素文縁である」。

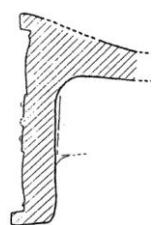
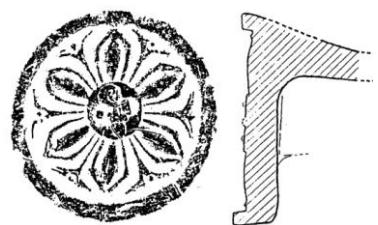
金堂・塔基壇は瓦積基壇で、講堂も瓦積基壇と推測されている。史跡公園に整備されている。



■ 喜田清水廃寺⁵⁾

広渡廃寺の上流に位置する(賀毛郡・加東市)。軒丸瓦が数種、発掘調査と採集で知られるが、すべて特色ある。六弁の軒丸瓦が2種類あるようである。

間弁(花弁と花弁の間に見える弁)に珠点があるのも極めて珍しい例といえる(上図)。この重弁風の軒丸瓦は、花弁の周囲に線描の弁の輪郭をまわし、凸状の間弁に珠文を置いており、鳥坂寺(柏原市)と共に通する[岸本2001]。



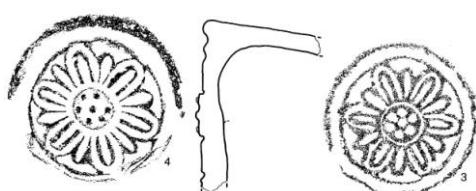
■ 見野(みの)廃寺⁷⁾

市川下流域の東岸になる。播磨国分寺の南、『播磨国風土記』に記された継潮

(つきのみなと)

の近くに位置する(飫磨郡・姫路市)。

近隣に新羅神社も鎮座する。



六弁の軒丸瓦は4種(1~4)あり、2種(2・4)は1・3を雄型にしたもので、文様が凹む。「類例が乏しく、わずかに2と同範の小片が市之郷廃寺(見野廃寺の北西、市川の西岸)から出土しているにすぎない」[今里2010]。

■ 単弁六弁(六葉)軒丸瓦の分布

以上、播磨での単弁六弁軒丸瓦の分布を見ると市川流域の見野廃寺が分布の西限で、中心は加古川流域である。下流の西条廃寺、中流の広渡廃寺・河合廃寺・喜田清水廃寺と4ヶ寺が狭い範囲に集中する。

六弁では共通するが、デザインは異なる。蓮弁(花弁)の鎧・稜線や凹弁、そして間弁上の珠点などは新羅系瓦と親縁性があるようである。

■周溝（二重圈線）・凹弁をもつ軒丸瓦

森郁夫氏は瓦当の中房周囲に沈線（周溝）をめぐらすものを古新羅の要素に挙げられており、広渡廃寺例を取上げられている〔森1990〕。

「播磨広渡寺廃寺資料は、中房を二重圈線で区画する。したがって、2本の圈線の間は一見沈線様にうかがえる。蓮弁が凹弁複弁であることも稀有な資料である」と評価された。

類例に挙げられている幡多（はた）廃寺（岡山市・律令期の備前国上道郡幡多郷）は中房の周囲に沈線をめぐらせ、かつ凹弁である。

「中房の外側に一種の沈線のような陰刻圈（周溝・圈線）が形成される瓦例」〔金誠龜1995〕は、新羅でもマイナーな？瓦のようである。

■広渡廃寺 (右図)

・鋸歯文縁複弁八葉蓮華文

小野市報告書の軒丸瓦IVに該当する。薄肉の蓮弁は輪郭線のみで、二葉ごとに輪郭線で囲むが、割付に狂いがあり、一葉が3弁になっている。低い三角縁に鋸歯文をもつ。

出土数30点。出土場所が金堂に多く、金堂の修理に使用されたものか、と推測されている。

平瓦には、シグザグ縄叩き（平瓦B類）のものがあり、河内とつながる。

■殿原（とのはら）廃寺⁸⁾

加古川の支流・万願寺川流域に立地（賀毛郡・加西市）。「既多（けた・きた）寺知識経（知識により書写された経典）」の既多寺の候補の一つ。

『加西市史』の「平板な単弁16弁軒丸瓦（IV類）」に該当し、中房の蓮子の有無により2種に分けられている。年代は、8世紀前半とされる。

■野口廃寺⁹⁾

加古川下流東岸。古代山陽道を挟み賀古駅家（かこのうまや）と向かい合っている（賀古

郡・加古川市）。塔・講堂は瓦積基壇。野口神社境内。

「軒丸瓦のほとんどを占めるものは鋸歯文縁複弁八葉蓮華文軒丸瓦Cで、…」〔今里1989〕とあるので、創建瓦であろう。加古川市の報告書では、軒丸瓦NM I類になり、広渡廃寺例より先行するようである。

加古川上流になる丹波市（旧氷上郡山南町）で野口廃寺出土の最も古い段階の資料（NM Ia類）と同範の軒丸瓦が出土している〔西川2009〕。

■石守（いしもり）廃寺¹⁰⁾

加古川下流東岸に流入する曇川の南岸（左岸）に位置する（賀古郡・加古川市）。

北岸丘陵上の西条廃寺とは指呼の間である。

曇川沿いには古代山陽道に先行する道路、あるいは郡家を結ぶ伝路（でんろ）が想定されている。

金堂は瓦積基壇。軒丸瓦の大半をしめるのは輻線文縁であり、平瓦にはシグザグ縄叩きが見られる。これだけ揃えば、播磨国風土記・鴨波（あは）里に記される加耶系の大部造（おおとものみやつこ）氏が建立を主導したのではないか、と考えられる。

発掘では確認されていないようだが、採集された軒丸瓦に周溝がみられる（上図）。

■小神（おがみ）廃寺¹¹⁾

揖保川西岸、古代山陽道が寺域の南を通過する（揖保郡・たつの市）。

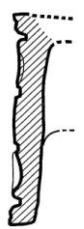
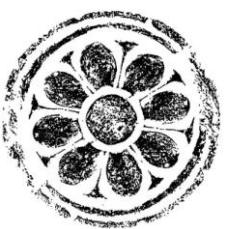
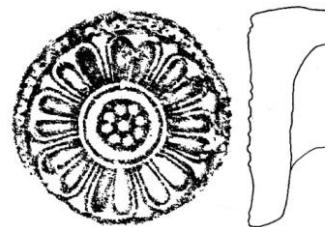
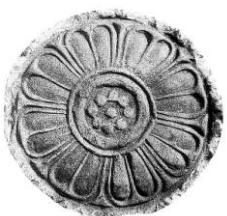
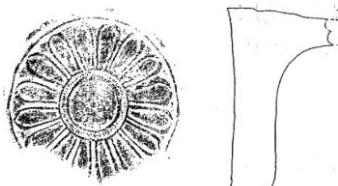
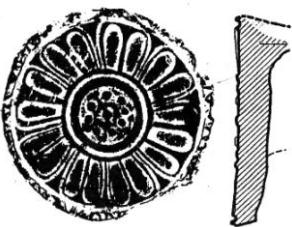
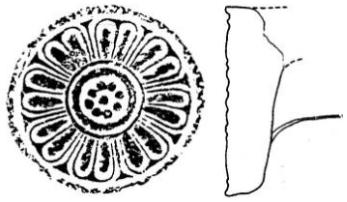
揖保郡では古代山陽道に沿って寺院が櫛の歯のように並ぶ。採集品。周溝は見られるが、蓮弁の形状が複弁で加古川流域と異なるようだ。

■新部大寺（しんべおおでら）廃寺¹²⁾

広渡廃寺とは加古川をはさみ対岸（西岸）に位置する（賀毛郡・小野市）。金堂南面に双塔をもつ薬師寺式配置。北東約1.5kmに

河合廃寺が立地する。あるいは、僧寺・尼寺であろうか。平瓦にシグザグ縄叩きのものがみられる。

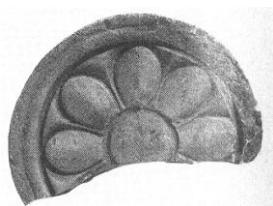
「単弁八葉で、…小型で端正な花弁と間弁から



なり、中房との間に無紋の凹部をもつ。中房に蓮子なく、…」[岸本1997]。

小野市報告書 [1972]

の高井悌三郎氏によれば、「小型の瓦当で、8葉の花弁（素弁）が弁面中央縦にかすかな稜線をもってふくらみ、うすたかい楔状の間弁がこれを浮き出す。中房は弁基をけずった溝線でかぎり、…」とある。



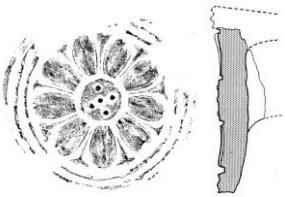
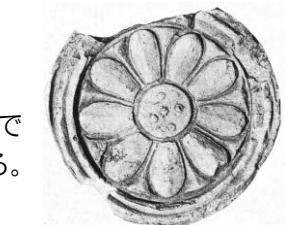
■ 河合廃寺（右図2枚）

河合廃寺は「単弁六弁」で取上げたが、「周溝」もある。重圈文縁単弁九葉軒丸瓦。

「…中房周囲に無紋の凹部をもうける点は、八弁の新部大寺廃寺の軒丸瓦に近い」[岸本1997]

河合廃寺では山背秦氏と関連すると推定される

「山田寺亞式」軒丸瓦も出土しており、新羅系瓦のルーツ・ルートを考える手がかりになる。

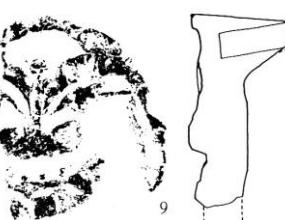


■ 中房周囲の周溝・沈線

森郁夫氏が挙げられた広渡廃寺例に類似する軒丸瓦は、殿原廃寺・野口廃寺・石守廃寺があり、この3ヶ寺は加古川流域である。丹波市（旧氷上郡山南町）にも同様のものがあり、出土地の詳細が分からぬが、加古川上流域である。

「単弁六弁」と「周溝」が共に見られるのは広渡廃寺のみで、さらに「単弁六弁」が2種類も出土しており、新羅系の要素が濃厚である。

新部大寺廃寺と河合廃寺例は、「周溝」は見られるがデザインは広渡廃寺例とは異なる。年代も広渡廃寺例より先行するようである。

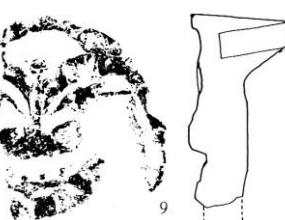


■ 獣面（鬼面）文瓦

■ 中井廃寺¹⁴⁾

獣面（鬼面）文軒丸瓦は全国的にみても珍しい（1989年段階で18例）。林田川流域、古代山陽道沿いに立地する（揖保郡少宅里・たつの市）。寺址は不明。林田川周辺は有力な渡来系氏族が蟠踞するが、里名にもなった「少宅秦公（おやけのはたのきみ）」も居住した。

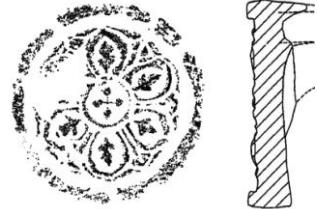
獣面（鬼面）文軒丸瓦は典型的な新羅瓦だが、文様が痛んでおり、狸？もどきに見えるのが残念。



■ 忍冬（にんどう）文（パルメット）

忍冬はパルメット（すいかずら）の漢名だそうで、これを文様に使った軒瓦がある。マイナーな瓦だが、播磨で2例知られる。

百濟末期の益山・弥勒寺や統一新羅に類例が見られるが、日本出土例の直接の祖型とは見做されていないようである。



■ 多哥寺（たかでら）廃寺

・単弁六弁忍冬文¹⁵⁾

加古川の支流・杉原川流域に立地（託賀郡・多可町）。量興寺境内。周辺と境内が部分的に発掘調査されており、四天王寺式伽藍配置が想定されている。

軒丸瓦は6型式（A～F）8種が確認されており、報告書のE I・E II型式になる（上図E I）。

「圈線で区画された中房の中心に十字形を置き、その端部にスペード形の蓮子を外向きに配する。…太い線で囲まれたそれぞれの花弁の中に一対の枝葉を持つ忍冬文を置く」。

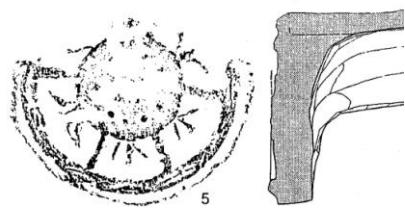
間弁の形も他に見られない。20点出土しており、D型式（29点）に次いで多い。

日本の忍冬文の初現は大和・中宮寺や法隆寺若草伽藍などで見られ、次いで、安芸・横見廃寺や河内・野中寺（やちゅうじ）のものが続くが、多哥寺廃寺出土品はどちらにも似ない。横見廃寺は倭漢（やまととのあや）氏、野中寺（羽曳野市）は渡来系氏族が主導した寺院と考えられている。

E型式の範型は2種類あることから、地元でデザイン化された可能性が高い。

■ 金剛山廃寺¹⁶⁾

揖保川の河口に近い西岸の谷底平野に立地する（揖保郡浦上里・たつの市）。寺址は龍隆寺境内周辺に想定されている。8種類の軒丸瓦が採集されており、「E類」が「いわゆる忍冬文装飾弁六葉蓮華文」になる（上図）。



5

花弁の中にパルメットを置くのは法隆寺若草伽藍や横見廃寺と発想は同じだが、似ても似つかないほど便化している。浦上里は阿曇連（あづみのむらじ）の拠点であり、阿曇氏は海人集団でありヤマト王権の朝鮮外交に関わっていた。浦上里には、「新羅の客（まれびと）」も登場するし、行基五泊の室原泊（むろふのとまり）・室津の所在地でもある。

■特殊な意匠（中房の十字形区画線など）

金誠龜氏は古新羅系軒丸瓦の特殊な意匠として、「中房がいくつかの線刻で区画されたり、中房の外側に陰刻圏が形成されているもの」として、西条廃寺や飛鳥寺の瓦を挙げられている。

■西条廃寺¹⁷⁾（右図）

・単弁八葉蓮華文

西条廃寺は「単弁六葉」でも取上げている。報告書〔加古川市1984〕の「軒丸瓦Ⅱ-a.b」に該当。「高く突出した小さい中房を凸線にて十字に区切り、4個の蓮子を配する。花弁は輪郭線を付け……。内区と外区間には幅0.5cmの溝が巡る」。出土数が最も多く、西条廃寺の主用瓦と考えられている。

飛鳥寺禪院から出土した軒丸瓦「XⅢ型式」は、「中房を凸線で区画し、その間に蓮子を飾る点が特徴的である。このような中房は、高句麗や新羅に特有のものであり、…（類例は）枚挙にいとまがない。中房の区画は8・6・4分割などがある。また、細長い紡錘形の蓮弁周囲に輪郭線を廻らせる蓮弁の類例としては、（略）」〔高田2012〕。

飛鳥寺禪院は、百濟系・船氏出自の道昭が662年（『日本三代実録』）に建立した禪院。

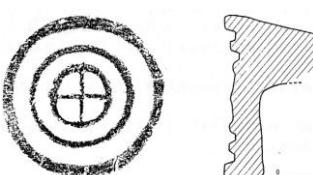
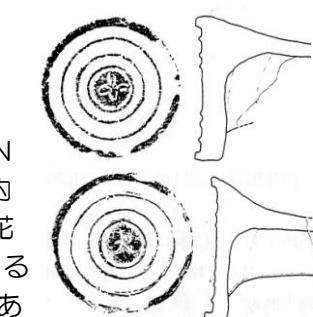
■石守廃寺

石守廃寺例は瓦当文様が蓮華文ではなく圏文である。「無芯三重圏文（NMⅡ類）」の中央の圏線内に「大」の文字や、「四花弁」を刻む資料が存在するが、オリジナルの文様であろうか。金堂跡と塔跡から出土。

■喜田清水廃寺

喜田清水廃寺例は、圏線内の中央を十字で区切っており、薩摩藩の家紋のようである。

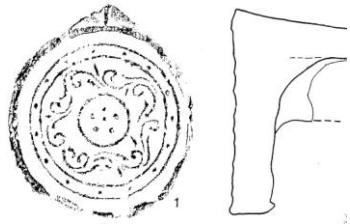
多哥寺廃寺の忍冬文軒丸瓦も中房は十字形に区画されている。石守廃寺・喜田清水廃寺例は圏文なので性格が異なる。



■唐草文（からくさもん）軒丸瓦と博（せん）

唐草文は新羅の代表的な文様である。

播磨で軒丸瓦と博を唐草文で飾る例が1例ある。新羅との直接的な交流が存在したのであろうか。



■蒲田山本遺跡¹⁸⁾

夢前川中流の東岸、川沿いといつてもよい場所。国道2号線太子・竜野バイパスの少し北、山所公園から止裾の墓地周辺（鯖磨郡・姫路市）。対岸には「L字

形石室」で知られる白毛山（しらけやま）群集墳が所在する。白毛は、新羅（新良 しら）の転訛？

用水路開削工事後、布目瓦・陶硯（とうけん）・転用硯・暗文（あんもん）土器（杯）・墨書土器・綠釉陶器などが採集された。瓦類は30個あまり。博は9個体分。遺構は確認されていないが、宗教施設あるいは役所が考えられる。

軒丸瓦には内区に唐草文と珠文帯、低い外縁の頂部には突起状のものが見られる。博には小口面に唐草文を入れたもの、表面に唐草文を施し、裏面に「道」と篆で刻字したものがある。

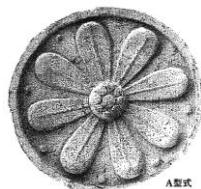
■間弁・弁間に珠点をもつ瓦

喜田清水廃寺出土の「単弁六弁」を取上げ際、「間弁上に珠点」が見られ、河内・鳥坂寺（柏原市）との類似を紹介した。鳥坂寺は聖武天皇や孝謙女帝が訪ねた「河内六寺」の一つで、鳥坂氏が主導した知識寺院と考えられている¹⁹⁾。

弁間に珠点をもつ軒丸瓦の初現は、飛鳥・豊浦寺（とゆらでら）でみられる。豊浦寺は飛鳥寺に続き、蘇我馬子が発願し日本で2番目に建立された寺院であり、尼寺である。

豊浦寺は播磨と因縁がある。豊浦寺の尼を得度したのは播磨にいた高麗（高句麗）の還俗僧・惠便と尼法明であり、高丘窯（赤石郡・明石市）の瓦も運ばれている。

豊浦式と呼称される弁間に珠点がある特徴的な瓦は隼上（はやあが）り瓦窯（宇治市）で焼かれており（右上図 A型式）、隼上り瓦窯は秦氏が関



珠文帯複弁八葉（右図）

「外区に52個の珠文、明確な外縁は認められない。瓦当径は復原すると約18cmでかなり大型である。出土数は10個体」。

・奥村廃寺同范瓦

因幡国（鳥取市国府町）で2ヶ所確認されている。玉鉢等ヶ坪廃寺（右図）と岡益（おかます）廃寺である²⁴⁾。

忍冬文（パルメット）で飾られた石柱が立つ岡益の石堂（いしんどう）は岡益廃寺の塔と見做され、大伴家持も見たであろう渡来色濃厚な寺院である。

■備前・富原北廃寺²⁵⁾

奥村廃寺の2種（六弁・八弁）の「珠文帯複弁軒丸瓦」に類似する（先行する？）軒丸瓦が備前・富原北廃寺で出土している。

岡山市街地の北東部、山陽自動車道・岡山ICのすぐ南に富原北廃寺が立地する。南、400mには津高郡家または津高駅家と推測される富原遺跡が存在する。

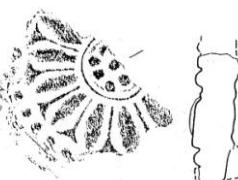
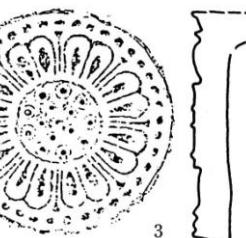
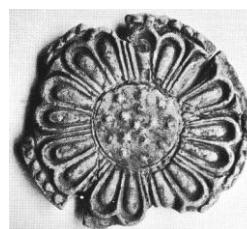
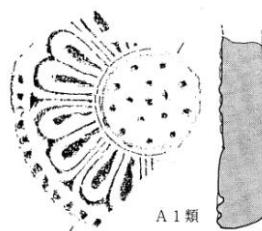
富原北廃寺では、外区が珠文だけの軒丸瓦が3種（複弁八葉2種・単弁十二葉1種）が確認されている。

亀田修一氏は、「日本本の軒丸瓦の文様構成において外区を連珠文だけで構成する例は少なく、畿内の主流派の瓦にはないようである。その例は、大和、河内、……十数例ある程度で、やはり珍しい。しかし、外区が連珠文だけで構成される例は統一新羅期の瓦には比較的多くみることができる。ただ新羅の例は蓮弁と連珠文が同一平面上にあるものもあるが、一般的には突出した外縁上に飾られるものが多い」と指摘される。

■珠文帯軒丸瓦（奥村廃寺同范瓦以外）

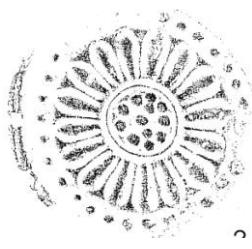
■長尾廃寺²⁶⁾

佐用川中流、佐用盆地に立地する。北に中国自動車道・佐用IC、南にJR姫新線佐用駅。佐用高校すぐ北。推定古代美作道が寺域南面を東西に通過する（讚容郡・佐用町佐用）。



↑ 珠文帯細弁十三葉

長尾廃寺では、奥村廃寺同范の珠文帯複弁六葉以外に、珠文帯細弁十三葉が2種18点、さらに、珠文帯細弁十六葉が3種出土しており、出土軒丸瓦の殆どが珠文帯であるるよう、特異な例になる。



↑ 珠文帯細弁十六葉

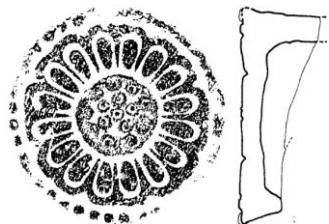
長尾廃寺の東に広がる長尾・沖田遺跡では十字に交差する道路遺構が確認されており、古代因幡道と美作道と推定されている。

■与井（よい）廃寺²⁷⁾

千種川中流の東岸、南向き山麓に立地する。南面を古代山陽道、JR山陽本線が通過する（赤穂郡・上郡町）。千種川を

遡上し、支流の佐用川に入れば長尾廃寺に至る。

調査はされていないが、珠文帯複弁八葉の軒丸瓦が採集されている（上図↑）。



■珠文帯軒丸瓦を焼成した峰相山（みねあいさん）窯跡群と漢部（あやべ）・漢人（あやひと）集団

日本において類例の少ない外区に珠点（珠文）を飾る軒丸瓦が、西播磨に集中して出土する。

とりわけ、奥村廃寺出土の複弁六弁の軒丸瓦は美作道沿い5ヶ所（寺院址4ヶ所）に分布するという際立った特徴をもっており、これら寺院の建立に当たった氏族集団（知識集団）は強いつながりがあったと考えられる。

奥村廃寺出土の複弁八弁の同范軒丸瓦は、美作道を経由した因幡道の終点、国府周辺で出土する。

美作道から因幡道が分岐する地に建つ長尾廃寺では、複弁六弁・細弁十六弁・細弁十八弁と殆どの軒丸瓦が「珠文帯」である。

古代寺院の軒丸瓦は単一の種類で葺かれるではなく、何種類もあるのが普通であり、寺院建築に関わった集団（知識）の構成員が新羅系デザインの珠文帯軒丸瓦を提供したのであろう。

奥村廃寺の軒瓦や中井廃寺の鬼面文軒丸瓦を焼いた窯は峰相山窯跡群（飫磨郡と揖保郡の境）と推定され、この窯跡群は漢部・漢人集団により經營されていたことについて異論・異説はない。

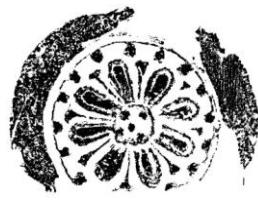
奥村廃寺の軒平瓦に見られる手書きパルメット（右図→）に関しては、渡来系工人（漢部・漢人集団）の抜きんでた技量を示すものと評価されている。



↑

■香山（こうやま）廃寺²⁸⁾

洗練されたとは言い難い「珠文帯」の軒丸瓦が香山廃寺から2種出土しており、参考資料に1種紹介します。

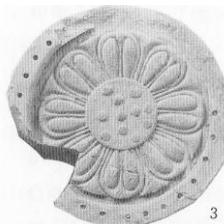


外区に珠文が廻る。位置は越部廃寺（分布表の2）から揖保川を北上し、西岸に立地する（揖保郡・たつの市新宮町）。年代は下るようである。

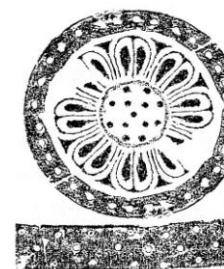
■その他、気になる軒丸瓦

■奥村廃寺

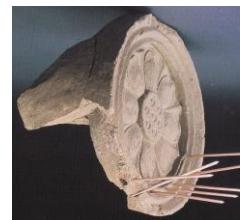
奥村廃寺では軒丸瓦13種が出土しており、個体数では121。珠文帯複弁六弁が3点、珠文帯複弁八弁が10点で、珠文帯の出土数は約1割。



最も多いのが、「竹管文縁」と呼ばれる類例の知られない軒丸瓦で、27点ある（→）。



瓦当の外縁に竹管様の施文具で刺突文を飾る。フリーハンドで刺突したせいか配置は不均等であり、側面にも施文する例がある。瓦当面径は15.5cmと珠文帯複弁八弁より一回り小さく、同じ屋根には葺けない。



鳥除けに櫛状のものを刺すための孔がある例は野中寺（羽曳野市）でみられるが、奥村廃寺の竹管文（刺突文）は明らかに装飾のためであり、珠文を逆転させた発想であろうか？

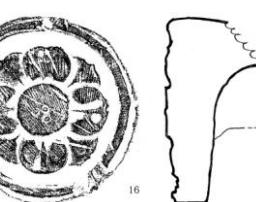
■太寺（たいでら）廃寺²⁹⁾

・単弁四葉蓮華文軒丸瓦

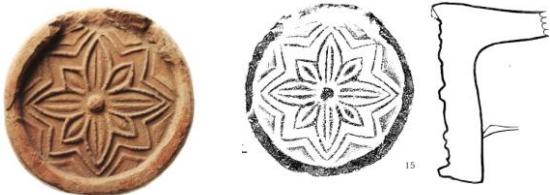
明石川東岸。明石城の東、瀬戸内海を望む台地の南端に立地（赤石郡・明石市）。高家寺の境内と重なる。境内と周辺が調査されている。古代山陽道は台地の裾を通過したという説が有力で、明石駅家も周辺に想定されている。



1点のみの収集品。文様構成では高句麗系といえそうで京大の「平安南道平壌附近発見高句麗時代圓瓦」（右図）と花弁の配置が似る²⁰⁾。



■太寺廃寺・複弁四葉文

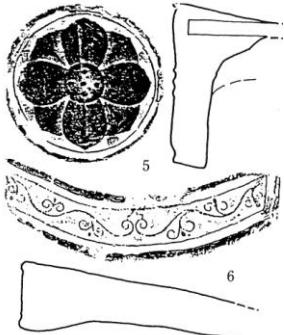


こちらの複弁四葉文もあまり見ることのないデザインで、太寺廃寺の四葉文軒丸瓦について、その系譜が気になるところである。

■四王寺（しわじ）跡³⁰⁾

・素弁四葉文軒丸瓦

太寺廃寺の「単弁四葉」と比較的類似するのが出雲国府跡の西北の山裾に立地する四王寺跡（松江市山代町）出土品。部分的な調査が行われ、『出雲国風土記』の山代郷南新造院に比定さ



れている。この素弁四葉文の年代は8世紀中葉以降とされる。軒平瓦の均整唐草文は、唐草文が両脇区から中央に向かって延びるもので、統一新羅時代の大きな特徴であり、日本ではほとんど見られないことから新羅系とされる。

■「四葉文」を採用した渡来系集団・氏族

赤石・太寺廃寺の四葉文軒丸瓦の文様は、出雲、さらに平壌（高句麗の都城 427～668）までつながるようであるから、高句麗文化を理解、あるいは保持していた渡来系集団・氏族が播磨に居住していたことが考えられる。

播磨には『日本書紀』、『元興寺縁起（がんごうじえんぎ）』（内容に小異あり）により、高麗の還俗僧・惠便がいたことが記される。古代において知識や能力をもつ僧が還俗する（させられる）例は珍しくなく、お世話になっている『播磨国風土記』の編纂者とされる播磨国司・楽浪河内（さざなみのかわち）も父親は僧である。

惠便は脱衣の僧（還俗僧）であり、彼の周辺には高句麗系や渡来系の有力な集団がいたものと思われる。明石川流域の太寺廃寺周辺では、すぐ北に大壁（おおかべ）建物が確認された寒鳳（かんふう）遺跡（神戸市西区伊川谷町）、すこし北に多様な韓式系土器（陶質土器・軟質土器・初期須恵器など）や煙筒（円筒形土器 オンドルの煙突か）が7点図化されている上脇遺跡（神戸市西区伊川谷町）が存在する。

*参考引用文献は「むくげの会HP」をご参照下さい。

引用・参考文献

- 1) 上原真人 1996 『日本の美術359 蓮華紋』
至文堂 p 44
- 2) 濱田耕作・梅原末治 1934 『新羅古瓦の研究』
京都大学 KURENAI Repository
稻垣晋也 1981 「新羅の古瓦と飛鳥・白鳳時代
古瓦の新羅的要素」
『新羅と日本古代文化』吉川弘文館
- 森 郁夫 1990 「瓦当文様に見る古新羅の要素」
『畿内と東国の瓦』京都国立博物館
- 森 郁夫 2003 「古代寺院研究上の問題点」
『学叢』25号 京都国立博物館
- 金 誠 龜・(訳) 武末純一 1995
「古代日本の新羅系軒丸瓦について」
『青丘学術論集』第6集 韓国文化研究振興財団
- 金 誠 龜 2000 「新羅瓦の成立とその変遷」
『新羅瓦博』国立慶州博物館 *ハングル
- 金 誠 龜・(訳) 寺岡 洋 2009
「統一新羅時代の瓦博研究」
『東アジア瓦研究』第1号 東アジア瓦研究会
- 3) 小野市教育委員会・広渡寺廃寺跡発掘調査団
1980 『播磨広渡寺廃寺跡』
岸本直文 1997 「広渡廃寺・新部大寺廃寺・河合
廃寺」『小野市史』第四巻 小野市
- 岸本直文 2001 「賀茂郡と古代寺院」
『小野市史』第一巻 本編 I 小野市
- 小野市教育委員会 2005 『国史跡 広渡廃寺跡』
- 4) 田岡香逸・高井悌三郎・藤澤一夫 1958
「播磨国河合廃寺」『史迹と美術』288
井内 潔 1971 「播磨古瓦資料 I 河合廃寺」
『井内古文化研究室報6』
- 5) 井内 潔 1971 「播磨古瓦資料 II 西条廃寺」
『井内古文化研究室報8』
加古川市教育委員会 1984 『西条廃寺一発掘調
査報告書一』加古川市文化財調査報告9
- 今里幾次 1989 「加古川市の古代寺院とその壇越」
『加古川市史』第一巻 加古川市
- 今里幾次 1995 「播磨古瓦研究序説」
『播磨古瓦の研究』真陽社
- 今里幾次 1996 「野口廃寺・石守廃寺・西条廃寺」
『加古川市史』第四巻 加古川市
- 6) 井内 功・井内 潔 1990 『東播磨古代瓦聚成』
井内古文化研究室
- 7) 今里幾次 2010 「見野廃寺」
『姫路市史』第七巻下 資料編考古 姫路市
- 8) 菱田哲郎 2010 「殿原廃寺」
『加西市史』第七巻史料編1 加西市
- 9) 加古川市教育委員会 2004

『野口廃寺 発掘調査概要報告書』

西川英樹 2009
「野口廃寺出土瓦に関する若干の考察」
『考古学の視点 兵庫発信の考古学』

- 10) 兵庫県教育委員会 2008 『石守廃寺』
兵庫県文化財報告 第331集
加古川市文化財研究センター 2011
『石守廃寺発掘調査概要報告書』
- 11) 今里幾次 1984 「小神廃寺・中井廃寺」
『龍野市史』第四巻 龍野市
- 12) 小野市教育委員会 1972
『播磨大寺遺跡 I 昭和46年度発掘調査報告』
- 13) 田岡香逸・高井悌三郎・藤澤一夫 1958
「播磨国河合廃寺」『史迹と美術』288
井内潔 1971 「播磨古瓦資料1 河合廃寺」
『井内古文化研究室報6』
- 14) 滋賀県文化財保護協会 1989
「滋賀文化財だより」137
- 15) 中町教育委員会 1995 『多哥寺遺跡』
中町教育委員会 1997 『多哥寺遺跡II』
羽曳野市遺跡調査会 1996
『野々上II 野中寺古瓦譜』
- 16) 今里幾次 1985 「播磨・金剛山廃寺の古瓦」
『兵庫史の研究』神戸出版センター
岸本道昭 2001 「金剛山廃寺」
『揖保川町史 第三巻 史料編』揖保川町
- 17) 花谷浩 1999 「飛鳥寺東南禅院とその創建瓦」
『瓦衣千年 一森郁夫先生還暦記念論文集』
高田貴太 2012
「瓦からみた7世紀の日羅関係についての予察」
『国立歴史民俗博物館研究報告』第167集
- 18) 秋枝 芳 2010 「蒲田山本遺跡」
『姫路市史』第七巻下 資料編考古 姫路市
中濱久喜 1990 「白毛9号墳・13号墳をめぐ
る二・三の問題」
『今里幾次先生古稀記念 播磨考古学論叢』
- 19) 安村俊史 2007 「六寺は誰が建てたのか」
『河内六寺の輝き』柏原市立歴史資料館
- 20) 宇治市教育委員会 1989 『史跡 隼上り瓦窯跡』
- 21) 加東郡教育委員会 2003 「捨鹿廃寺」
『埋蔵文化財調査年報一2001年度一』
加東郡教育委員会 2004 「捨鹿廃寺(2次)」
『埋蔵文化財調査年報一2002年度一』
- 22) 姫路市 2010 「播磨国分僧寺跡・国分尼寺跡」
『姫路市史』第七巻下 資料編考古
古代を考える会 1978 『古代山陽道の検討』
- 23) 龍野市教育委員会 1997 『奥村廃寺』
龍野市教育委員会 2002 『奥村廃寺II』
兵庫県教育委員会 2009 『奥村廃寺跡』

たつの市立埋蔵文化財センター 2007

『西播磨の古代寺院と蓮華文蒂鷲尾』

24) 川上貞夫 1966 『岡益の石堂』 矢谷印刷所

25) 亀田修一 1995 「吉備の朝鮮系瓦」

『青丘学術論集』第7集 韓国文化研究振興財団

湊 哲夫・亀田修一 2006 「富原北廃寺」

『吉備の古代寺院』吉備人出版

26) 藤木 透 2003 「讃容、赤穂郡の古代寺院」

『古代寺院からみた播磨』播磨考古学研究集会

柏原正民 1993 「長尾・沖田遺跡検出の道路遺構と周辺の残存条里水田」

『長尾・沖田遺跡(Ⅱ)』兵庫県教育委員会

27) 今里幾次 1999 「与井廃寺」

『上郡町史』第三巻 史料編 I

28) 今里幾次 1987 「播磨・香山廃寺の古瓦」

『香山一縄文遺跡と古代寺院跡一』新宮町教委

29) 発掘された明石の歴史展実行委員会 2013

『明石の古代』明石市

30) 亀田修一 1993

「朝鮮半島から見た出雲・石見の瓦」

『八雲立つ風土記の丘』118・119号合併号

島根県教育委員会 1994 『風土記の丘地内遺跡

発掘調査報告 X 山代郷南新造院新造院跡』

寺岡 洋 2012 『ひょうごの古代朝鮮文化』

むくげの会

四王寺跡の北には来美(くるみ)廃寺が所在し、北新造院に比定されている。来美廃寺は奥村廃寺と同じく金堂両脇に塔を配置した伽藍配置、軒丸瓦には外区に唐草文をめぐらす新羅系の軒丸瓦が出土している。